

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.64

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

博聞社版カッセル国民文庫について

田村道美

『丸善百年史』「第12章 叢書きそい起る」には、明治期に輸入された英語の廉価版叢書の紹介があり、代表的叢書として、Everyman's Library等とともに Cassell's National library (以下、カッセル国民文庫と呼ぶ) が挙げられている。しかし、同文庫についての研究は等閑に付されてきた。筆者は10年以上この文庫の調査を続けているが、最近、同文庫の第1作として刊行された Lord Macaulay の *Warren Hastings* が博聞社から刊行されていたことを知った。

所蔵する金沢大学附属図書館から借り受け、現物を確認してみた。装丁は背革、マーブル平の豪華仕立てで、元装とは全く異なる。また、元版初版の扉は CASSELL'S NATIONAL LIBRARY./ WARREN HASTINGS./ BY/ LORD MACAULAY./ 社章 (Walter Crane による La Belle Sauvage の絵) / CASSELL & COMPANY, LIMITED./ LONDON, PARIS, NEW YORK & MELBOURNE./ 1885. となっているが、博聞社版の扉では、社章? (飛翔する鶴) 以下が異なり、TOKYO: THE HAKUBUNSHA./ BRANCHES./ OSAKA, CHIBA, SAITAMA & FUKUOKA./ 1887. となっている。また、元版では本文最終頁の裏側に Printed by Cassell & Company, Limited, La Belle Sauvage, London, E.C. と印刷されているが、博聞社版では Printed by/ The Hakubunsha, No. 1, Shichome, Ginza,/ Tokio. とある。さらに、博聞社版には日本語の奥付があり、発行所は東京銀座四丁目 博聞本社、発行兼印刷者は兵庫県土族 長尾景弼とある。このように、博聞社版では扉上部にある CASSELL'S NATIONAL LIBRARY. 以外に Cassell の名はどこにも見当たらない。また、扉の発行年は1887年(明治20年)であるが、奥付の発行年は明治23年となっている。

博聞社は長尾景弼が明治5年に創業し、官庁の法令集等を刊行し成功を収めた出版社である。同社は明治19年頃、英国の出版社ロングマンズと特約を結び、『ロングマンズ第一リードル独案内』等を販売した。(これらの書籍の奥付には著作権免許の年月日が記されている。) しかし、明治20年12月に社屋が火災で焼失し、翌年に社屋を再建するも明治25年に多額の負債のため社屋・家屋等が差し押さえられた。博聞社が明治23年に海賊版と思われる *Warren Hastings* を刊行したのは、この厳しい経営状況と何らかの関係があったのか否か。謎の多いこの書物について今後も調査を進めていきたい。

(香川大学/日本英学史学会中国・四国支部副支部長)

平成22年度第2回(通算63回)研究例会のご案内

本年度第2回(通算第63回)研究例会を、来る12月11日(土)に香川大学教育学部(香川県高松市)にて開催する運びとなりました。開催にあたり、支部長の竹中龍範先生、副支部長の田村道美先生には格別のご配慮を賜りました。心より篤くお礼申し上げます。

今回の例会では、保坂芳男先生、田村道美先生による研究発表が予定されております。会員の皆様にはぜひ高松の地にご参集いただきますよう、ご案内申し上げます。

研究例会のあとに忘年懇親会を企画いたしております。こちらの方へも多くの皆様のご参加をお待ちしております。

高松研究例会プログラム

日時：平成22年12月11日(土) 午後1時30分 受付開始
会場：香川大学教育学部(〒760-8522 香川県高松市幸町1-1 TEL:087-832-1523 (竹中研究室))
第3会議室(教育学部2号館2階)

開会行事(14:00~14:10) 支部長挨拶

研究発表①(14:10~15:20)

竹林文庫の英文原稿に関して

保坂芳男(立命館大学)

【概要】岩国英国語学所(1871-1873)の卒業生、田中稻城(1856-1925)を調べているうちに、英文原稿(同志社大学竹林文庫)を多数発見した。その英文原稿をすべてチェックした結果、大きく3つに分類することができた。①English Readersの原稿の一部、②ドイツ語教科書「独逸語読本」の原稿の一部、③「東京繁盛記」(服部誠一著、1874年)の翻訳。今回の発表では、上記の③を中心に、その内容、翻訳の経緯についての考察を行いたい。

(休憩 15:20~15:30)

研究発表②(15:30~16:40)

「カッセル国民文庫」の書誌的研究

田村道美(香川大学)

【概要】『丸善百年史』に、明治期に輸入された英語の代表的廉価版叢書として、Everyman's Library等と並んで、Cassell's National Libraryがあげられている。「カッセル国民文庫」は明治中期から大正初期の英文学受容に関して重要な役割を果たしたと考えられるが、同文庫についての研究は皆無に等しい。12月例会では、同文庫の書誌的研究の成果を発表する予定である。

閉会行事(16:40~17:00) 副支部長挨拶、写真撮影

懇親忘年会(18:00~20:00)(高松市内の会場を予定、会費5,000円程度)

中国・四国支部ニュース

>> 『英學史論叢』第14号原稿募集

中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第14号(2011年5月発行予定)の原稿を募集します。

研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

・ご投稿に際しては、以下に掲載の「執筆要領」および「標準書式」に従ってください。

・投稿予定の方は「投稿申込」をお願いします。

2011年1月31日までに事務局へ、メール

(umamoto@pu-hiroshima.ac.jp)、または FAX (0824-74-1725)にてお申し込みください。

・原稿提出の締切は、**2011年2月20日**(消印有効)です。事務局まで郵送してください。

・研究論考、研究ノートへの投稿は、正副計3部をお送りください。英学史随想、書評等の原稿は1部お送りください。

>> 会員異動(敬称略)

入会 山田昌宏(やまだ しょうこう) 岡山県

所属: 清心女子高等学校(非常勤講師)

研究テーマ: 英語教科書史



『英學史論叢』執筆要領

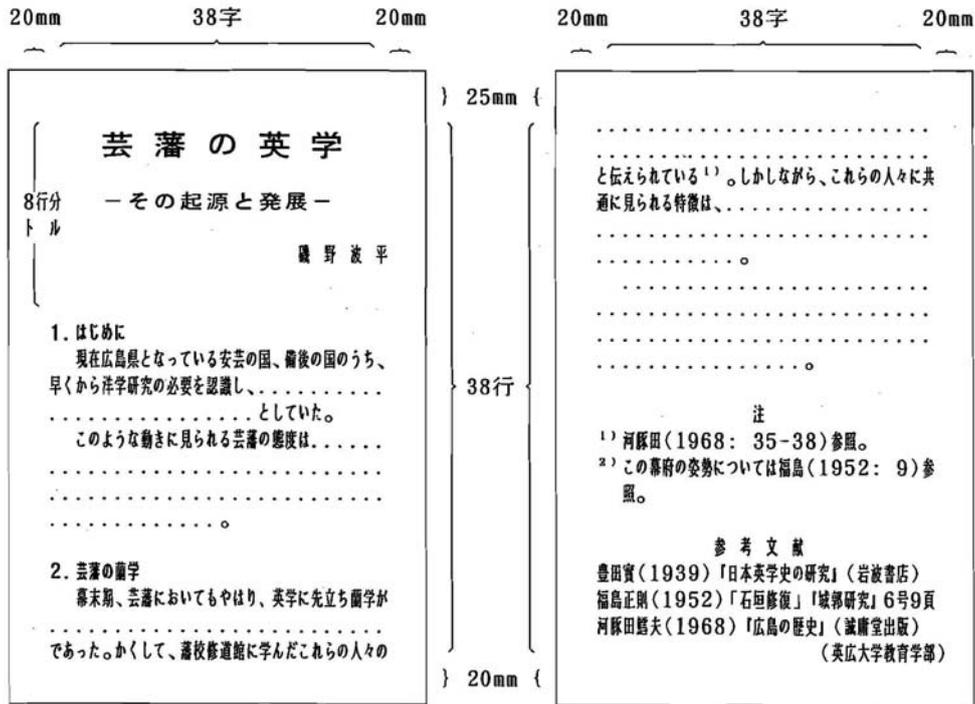
- ・『英學史論叢』に載録するものは研究論考・研究ノートおよびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。
- ・研究論考・研究ノート、その他のものとも、原則として提出されたものをそのまま複写印刷するものとする。手書き、タイプライターやワープロによる印刷など、いずれも標準書式に従った完全原稿を提出するものとし、執筆者による校正は行わない。用紙は白紙を用いるものとし、原稿用紙等罫線のはいつたものは受理しないことがある。
- ・研究論考・研究ノートは日本英学史学会中国・四国支部研究例会、日本英学史学会本部月例会および年次大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副3通を提出し、編集委員会の査読を経て掲載の可否、書き直し等を決定するものとする。なお、編集委員会は必要に応じて編集委員以外の会員に査読を委嘱することができる。
- ・研究論考・研究ノートは参考文献・資料・図版等を含め、10ページ以内とする。
- ・掲載決定後の最終原稿はプリントアウトしたものと合わせ、電子媒体によるデジタルデータを提出することを原則とする。
- ・研究論考・研究ノートの掲載料は1編につき3,000円とする。ページ数を超過した場合は、1ページにつき1,000円の追加掲載料を負担するものとする。学生会員については、規定ページ数以内の場合は掲載料を免除する。
- ・その他のものについては、英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿および事務局・編集部の執筆依頼によるものとする。なお、新刊書評・紹介は日本英学史学会中国・四国支部会員の著書ならびに中国・四国支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等、いずれも原則として2ページ以内とする。

『英學史論叢』標準書式

- ・用紙はB5判白紙を用い、上部に25mm、下部および左右に20mm、それぞれ余白をとる。
- ・本文は、10ポイントないし10.5ポイント文字を使用し、1行あたり38文字、1ページ38行の書式によって作成する。
- ・本文第1ページに8行分をとって論文タイトル、執筆者名を記す。論文タイトルは4倍角文字ないし18~20ポイント文字を使用し、中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて、右に寄せて記す。なお、論文末に、右に寄せて、執筆者の所属をカッコに入れて示すこととする。
- ・本文中の見出しについては1行アキとし、番号を付して太字、あるいはゴシック体とするか、下線を施して見やすくする。

- ・注は、脚注、尾注のいずれも可とするが、本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。
- ・参考文献、引用文献は論文末に一括して示す。
- ・英字・数字はすべて半角文字とする。

『英学史論叢』標準書式



英学史学会全国ニュース

》》 日本英学史学会第47回全国大会

今年度の全国大会は、10月23日(土)～24日(日)、京都大学吉田キャンパス(京都市左京区吉田本町)を会場に行われました。

中国・四国支部所属会員によって行われた研究発表は次の通りです。

- ・松村幹男「文部省中等部英語講習会：広島開催の事例」
- ・保坂芳男「H. D. Lelandに関する研究：岩国中学での教育活動を中心に」

※日本英学史学会(本部)の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です(入会金2,000円、年会費5,000円)。

》》 「日本英学史学会報」No.122

年3回発行されている「日本英学史学会報」No.122が発行されました(9月1日)。

- ・〈〈史に聴けば〉〉(23) 英学史は雑学か(西岡淑雄)
- ・「英学一口ばなし：京都大会ということで京都に縁のある小話」(山下英一)
- ・岡目八目「市川繁治郎氏と英学」(滑川明彦)ほか

◆支部活動報告として、中国・四国支部平成22年度総会ならびに第1回(通算62回)研究例会報告、『英学史論叢』第13号目次などが掲載されています。

》》 『関西英学史研究』第5号

関西支部研究『関西英学史研究』第5号が発行されました(2010年3月31日付)。

「独歩と蘇峰：『国民新聞』における日清戦争報道より」(石倉和佳)

「F. V. ディキンズの手簡から見えること—晩年における日本観の変容—」(岩上はる子)

(資料) 日本英学史学会関西支部研究発表記録(1979～2009) ほか

※閲覧希望の方は、事務局までご連絡ください。

英学史情報ひろば

◇ハーンの神在月：全国・小泉八雲の会&ミュージアムの未来を考えるサミット

(10月9日・10日、松江市総合文化センター)

<第1日>

- ・オープニング：挨拶、演奏と朗読（パイプオルガンの演奏の中、小泉凡先生が「神々の国の首都」‘心象’を朗読された。）
- ・参加団体の紹介（ハーンの研究、顕彰団体、および関連施設の団体およそ30のグループの紹介）
- ・グループ討議「いま、どういう〈場〉で八雲が生かせるか？」
- ・第44回ヘルンをたたえる青少年スピーチコンテスト入賞者によるスピーチ
- ・パネルディスカッション「八雲を生かす4つの場」

ハーン来日120周年を記念し、全国のハーンの研究、顕彰団体、施設の関係者が“神々の国の首都”に集った。八雲の事績を今後はどう生かすかを話し合うグループ討議では、「学校教育の場」「研究の場」「文化活動の場」「観光の場」に分かれ意見交換が行われた。「文化活動の場」の司会は風呂先生。先生の主宰する「広島ラフカディオ・ハーンの家」のほか、京都の「小泉八雲に親しむ会」、焼津、松江の記念館、池田美術館等の発表もあった。その後、4グループでの討議が全体の場で発表された。概要は次の通り。

学校教育の場：「稲むらの火」のDVDを作成し学校等に配布したがあまり活用されていない。

今後、いかにそれを活用し啓蒙できるか。

研究の場：体は西洋、心は日本である小泉八雲の残した作品等を、いかに現状のまま維持していくか。

文化活動の場：100周年記念行事で投げた小石が大きな波となり各地で顕彰活動が続いている。ハーンは生きがいである。

観光の場：充実した顕彰活動。おもてなしの心を大切にする。商品の販売にあたっては八雲の名を汚さず品性を保つ。

会場では書籍、ハーンコーヒー、記念バッジ等の販売もされていた。中でも島根県海士町の「ハーン通貨」（ハーンを印刷した500円紙幣。海士町内で流通させている）には感心した。八雲会 HP (<http://yakumokai.org>) のツイッターで「ハーン神在月」は“研究大会”ではなくて“お祭り”である、とのごとく、“ハーン”を全身に浴びた。夕方か

らはゴーストツアー、懇親会等が開催され、翌日には「トーク&映像」「パネルディスカッション」「オープンマインド美術展」等、まだまだ“お祭り”は続いた。

都合でパネルディスカッションの途中で会場を後にしたが、松江駅までのルートを文化センターの職員に尋ねると、方向音痴の私のために大きな通りまで道案内をしてくださった。「お仕事、すみません」と詫言ると「いえ、これが仕事ですから」との言葉に感動した。

「ハーンさん、あなたの愛した松江人は120年、生き続けていますよ」

思わずハーンに語りかけ、ビルの立ち並ぶ松江駅までの道のりを歩いた。そしてハーンが広島を通過するときに通ったかもしれない道をバスに揺られ「お祭り」の余韻に酔いながら帰路についた。

2日目の様子は参加されたハーンの家会員・古川正昭氏のHPにレポートがある。

(<http://easthiroshima.com/>) (鉄森令子 記)

広島英学史の周辺(30) 会員の方から「大谷探検隊支えた言論人」（中国新聞 2008年7月29日）という記事のことを教えていただきました。大谷光瑞の英国留学の際に香港まで随行し、後に大谷探検隊の広報を担った神根善雄（かみね ぜんおう）について、広島大学・白須浄眞先生の調査に基づいて書かれています。▼神根は安芸高田市・善教寺の住職。広島英語学校で学び、広島と京都での新聞記者を経て、西本願寺へ。後に広島別院の輪番も務めたそうです。この記事を読んで、仏教と英学は無縁ではないということ強く感じました。▼国泰寺高校の前身が明治期に「広島英語学校」であった期間はわずかですが、多くの人材を輩出しています。『明治初期教育関係基本資料』（近代日本学芸資料叢書第4輯、湖北社、1981）で復刻された「広島英語学校職員生徒年表」には、『坂の上の雲』に登場する下瀬雅允、牧野清人両氏の名前も見られます。広島の英学、まだまだテーマはたくさんありそうです。▼冬の例会が近づいてきました。高松でお会いしましょう。（馬）

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No. 64

2010年11月5日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部（代表 竹中龍範）

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: (0824) 74 - 1725 (直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.64 November 5, 2010